

# 佛教大學圖書館所藏稀觀古鈔本について

坪 井 俊 映

## 一、建長版・選擇本願念佛集について

法然上人の代表的著述である選擇本願念佛集は上人の滅後八ヶ月、即ち建曆二年九月に開版せられたと傳える。これは、その末尾に「庶幾一經高覽之後埋<sub>二</sub>千壁底莫遺窓前恐令<sub>三</sub>破法之人墮於惡道<sub>四</sub>とある意趣にそむくもののようにであるが、師の姿を見ることの出来なくなつた弟子達が上人の人格や教えを慕うのあまり、止むに止まれぬ心情より遺著開版という大事業をなさしめたのであらう。これを出版年次に因んで「建曆版」選擇集と呼んでいる。しかるに、この版本は滅後に遭遇した嘉祿三年十月の法難の時に、叡山の三塔の會議により上奏勅許を得て京洛各地よりこの刊本並に版木が没収せられ、比叡山上の大講堂の前において焼き棄てられたといわれている。<sup>(1)</sup>その後十二年にして、延應元年（二三九）に再版せられた。これが「延應版」といわれるもので、現に京都鹿ヶ谷法然院にその版木が保存せられている。<sup>(2)</sup>これは現存選擇集版本の中で最も古いものである。その後、建長三年（一二五）七月に入阿彌陀佛により再版せられ、正中二年（一二五）には比丘了延によりて再々版されている。その後もしばしば開版せられ、石井教道博士著の選擇集の研究（總論篇）によると、鎌倉開版より大正九年まで七百八年間に前後七

十九回も開版されている。従つて、平均九年に一回の割で印刷せられたことになる。そのうち一番多數開版せられた時代は徳川時代であつて、佛教各宗派の教學盛行と共に、本書を披讀する階層も増加し、實に五十回もこれが印行されている。さらに大正九年以後の出版回数を加えるならば、鎌倉開版より現代まで凡らく百版を越えるであろう。かくの如く出版回数壹百版を越える祖典の印行は、凡らく空前のものと評してよいであらう。

而して、いまここに紹介せんとするものは本學圖書館に收藏されている「建長版」の選擇集であつて、法然滅後三十九年、即ち第三回目開版のものである。これは淨土宗宗寶に選定せられているものである。本書の紙質は泉貨紙であつて、さらに同質の泉貨紙を以て裏打がしてある。本紙は縦25.9 cm 横15.2 cm (裏打紙の縦26.5 cm 横16.6 cm) 上下二冊に分冊されていて、上冊は七十八葉、下冊は五十三葉あり、上冊の卷頭に選擇本願念佛集と題し尾題なく、下冊は首題を欠き、尾題の次に一行あけて「淨土門解脫詮 今開印版弘流轉 廻施尊儀及群類 順次同生九品蓮」の偈を二行に亘つて印刷している。刊記は無い。この四句の偈文は西本願寺に所藏されている建長三年版の偈と同一であるが、本學所藏のものには刊記願主名を欠いている。西本願寺本には「建長三年七月 日、願主入阿彌陀佛」なる刊行年月と發願主の名を出している。<sup>(3)</sup> 元來、西本願寺所藏の建長版選擇集は上下二冊に分かれているが、上下版を異にする寄せ本であつて、下冊のみ本學圖書館所藏のものと同じ版本であつて、上冊は建長以後の版本といわれている。<sup>(4)</sup>

しかし、その下冊も西本願寺本の方に文字に磨滅した所の多い點より考えて、本學のものより後摺りであることがわかる。さらに宗寶推薦理由書によると、東洋文庫にも建長版選擇集が收藏せられていて、これも上下版を異にする寄せ本である。しかし、東洋文庫の上冊は延應版と同一のものであるという。本學所藏のものも上巻は延應版

選擇集と比較すると同一のものであることが知られる。

従つて、現在、建長版選擇集といわれるものが三本知られているが、そのうち東洋文庫と佛教大學圖書館所藏のものが、上巻を延應版で以てし、西本願寺のものはこれとは異なつた後世の版本でした寄せ本であることが知られる。而して下冊は三本とも同じ版本であるから、或は建長版なるものは下冊のみの印行で、上冊は無かつたのではないかといわれている。しかしながら、これについては今後の探索と研究が必要である。

この版本の願主入阿彌陀佛とはいかなる人かは明らかでないが、凡らく淨土宗二祖聖光房辨長の門人入阿入西のことで無かうかと思われる。入阿は辨長膝下にあつて常隨給仕した弟子であつて、弘安八年、八十三才で入滅しているから、若し彼が建長版選擇集の願主であつたとするならば、これは四十九才の時の印行であることが知られる。而して、本書はもと京都市下京區五條の極樂寺に所藏されていたものであるが、その前は百萬遍知恩寺第三十一代岌興（天正十三年AD一五八五、晋山）の藏書のようである。岌興は寶蓮社善心と號し、學内外に通じた學匠であつて、諸國に遊歷の後、越前の西方寺に住し、正親町天皇の重請により百萬遍に進董した人である。岌興が何處でこの建長版を入手したかは不明であるが、これが極樂寺に傳えられ、極樂寺第十六世嘉譽によつて裏打されて原型の保存につとめられた。さらに戦後、學徒研究の資料として當時の住職よりこれが本學に寄贈されたのである。

## 註

- (1) 石井教道著、選擇集の研究總論篇一五一頁
- (2) この延應版選擇集は大正九年十月に複版せられ、この刊本は現に佛教大學圖書館にある。
- (3) 藤堂祐範著、淨土教版の研究圖版第十五

(4) "  
 (5) "

圖版第十一

## 二、和語燈錄について

——要義問答、大胡太郎秀實へつかはす御返事——

法然上人が弟子や歸依者達に書き送られた教誡書、消息文は滅後三回に亘つて輯録せられた。その初めは法然上人一期物語であつて、勢觀房源智の見聞を主として、兼ねて諸弟子の間に伝えられた説話傳説を収めたものである。その編輯年代は大體、法然滅後四年より三十年の間といわれている。これは全篇漢文で書かれ、凡そ六篇ある中、第一編は淨土隨聞記以下二十條あり、第二編は禪勝房の間に答えられたもので總計十一問答を収め、第三編は三心料簡以下二十七法語、第四編は法然上人の略傳、第五編は臨終日記、第六編は三昧發得記である。第二回の収録は親鸞の西方指南鈔のそれである。西方指南鈔六卷は親鸞が康元元年（一二五六）より同二年に亘つて書寫したものであつて、現に高田專修寺の寶庫に収められている。これには和文のもの、漢文のもの、片假名書きのもの等あり、法然聖人御說法の事以下二十八の語録が収められている。法然上人滅後四十餘年の收輯である。第三回の収録は淨土宗第三祖良忠の門人望西樓了慧の語燈錄の編纂である。これには漢文と和文の二種あり、漢語燈錄は文永十一年（一二七四）の編輯で總じて十八章あり、和語燈錄は建治元年（一二七五）の收輯にして二十五章を収め、さらに拾遺語燈錄として十一章を追輯している。

かくの如く、法然上人の語録は滅後三回に亘つて収録編纂されたが、そのうち、了慧の收輯した漢和兩語燈錄が量の上において一番數多くを集めている。しかし、法然上人滅後六十二年に了慧が和漢語燈錄を編纂した時には、

法然上人に名を藉る偽書がかなり横行していたらしく、拾遺和語燈錄卷下（淨全九卷）に「愚見のをよぶところ集編かくのごとし。しかるに世の中に黒谷の御作という文おほし、いわゆる決定往生行業鈔……この文とは餘の和語の書に文章も似ず義勢もたかへり、おほきにうたかひあるうへに、古人偽書と申しつたえたり」とあつて、語録の編纂にあたつて、その取捨選擇に相當苦心したことが伺える。それと共に既に収録したものの中に、或は誤つて偽書を眞書として編輯したものないかと思われ、現今各方面の學者によつて法然上人語録の研究が盛んに行われている。

かくて、法然上人の遺文は前後三回に亘つて収録せられたが、この刊行は極めて遅く、法然上人の代表的著述である選擇集が滅後まもなく出版（建曆二年版）せられたといひ、つづいて延應版（一二三九）建長版（一二五一）等が印行せられているに對して、その他の消息文教誠書の開版は鎌倉末期まで見ることが出来ないのである。これらの消息文教誠書の印行は第三回目の収録者望西樓了慧によりて、元亨元年（一三二一）に和語のものが初めて出版せられた。これが元亨版和語燈錄といわれるもので、學者の珍重するものである。その後、語録の一部の出版はあつたようであるが、全卷の印行はなく、徳川時代に入りて、寛永二十年（一六四三）（町版）と正徳元年（一七一）（義山開版）の二回に亘つて刊行せられている。漢語燈錄の方は永らく寫本のままで傳えられ、正徳五年（一七一五）に義山によつて初めて開版せられたのである。

而して、義山が正徳元年に和語燈錄を開版するにあたり、元亨版の和語燈を探し求めたけれども見ることが出来なかつたらしく、和語燈錄日講私記第一卷（淨全九卷）に、「扱、此書（和語燈）の印本は此の跋に有る如く、元亨年中に開版せり、爾るに老師義山其印本を尋ね玉ふ事、數年なれとも未得、爰に寛永年中に片假名に漢文をましえ加

へて印行した本あれども、今の序の意に違ふ」とあり、それで伊豆藥王寺に一本あるを知り、知恩院四十二世白譽秀道に依頼して、本山より願ひ出てこれを借用し、それを底本として諸々の古寫本と校合して出版したという。而て義山がこの和語燈錄を開版した當時には諸々に異本古寫本があつたようで、和語燈錄日講私記第一卷（淨全九頁 六七三頁）には「何とそ和字の古本をと多年尋ね玉ふに、或は古き假名書きの本、或は所々の堂上方にも、或は北野眞盛の本などあれども或はかけ、或は文中の具略、又は元祖の法語とも見えざる事とありて慥かならぬ本なり」とあつて諸々に法然上人の語錄の斷片が所藏されていたようである。現在、法然上人の語錄のうち、鎌倉時代の古寫本として珍重されるものは、上記の一期物語、西方指南鈔、法然上人の諸傳記に集録されているものの他に、金澤文庫には、往生要集釋（良聖手譯本）、淨土三部經大意の二本を藏するのみである。京都安居院西方寺に藏されている登山狀は室町末期のもの、西本願寺の寶庫にある禪勝房にしめす御詞（念佛往生要義抄所収）は長錄四年（一四六〇）の寫本である。<sup>(3)</sup>なお、この他に黒谷金戒光明寺所藏の一枚起請文を初め、寺寶として崇敬されている語錄の古寫本が各地に存在するであろうと想像されるが、學的對象として研究されているものは上記の如く誠に寥々たる有様であつて、書誌學研究の上より鎌倉時代の古鈔本とされるものは誠に僅かしか傳わつていない。

いま、ここに紹介せんとするものは佛教大學圖書館に収藏されている「大胡太郎秀實につかはす御返事」と「要義問答」との二本の語錄である。體裁は二本とも縦24.5cm、横15.5cm、紙質は鳥ノ子紙、粘葉綴、一面六行、一行十七字乃至二十字の漢字平假名混り文で、書體は二本とも同一書體であつて、鎌倉時代の雄渾な筆勢でもつて、行書體に書かれている。「大胡太郎秀實へつかはす御返事」は五葉、「要義問答」は十葉の斷片であるが、いづれも鎌倉時代を降らざる古寫本である。

このうち「大胡太郎秀實へつかはす御返事」（以下、大胡の返事と略稱）は首尾を欠き、淨土宗全書所収和語燈錄第三卷五五頁下より五五七頁下に亘るもので、中に一丁の落丁がある。この「大胡の返事」は法然上人が三心と五正行とについて述べられたものであるが、その中、この斷簡は五正行を説く中の正雜二行の得失を説く一段のみである。而て、その斷簡の語句の使い方（特に動詞助動詞）は西方指南鈔所収本とは異なり、元亨版和語燈錄と類似している。西方指南鈔が親鸞によりて書寫されたことについて異説が存するが、この指南鈔所収の「大胡の返事」は片假名で書かれていて文章の読み方に稚拙な處が見られる。しかし、この斷簡にはかかる稚拙な文章はなく、元亨版和語燈と同様に流暢な文勢を以て書き流されている。

要義問答も首尾を欠き、中に數葉の落丁がある。これは淨土宗全書所収和語燈錄第三卷五四一頁上より五四九頁上まで、即ち總じて十三問答の中、第八問答より第十二問答までのものである。これも前の「大胡の返事」と同様に西方指南鈔所収本の如き稚拙な文章なく、元亨版和語燈所収本と同様に流調な文章をもつて綴られている。

しかしながら、嚴密に一字一句を元亨版和語燈と比較すると、この斷簡二本ともに全同ということが出來ず字句の出没が見られるが、西方指南鈔所収本、義山正徳版より元亨版により一層の類似性を見出すのである。されば、この二斷簡の原型がいかなるものであつたかというに、ただこの十數葉の斷片のみをもつて、その全體を推定することは甚だ困難であるが「大胡の返事」と「要義問答」とが同じ紙質で、同一書體より書かれているのを見て同一書寫本の一部分であつたことには相違ないが、しかし、この兩法語のみが綴られて別行していたと考えることは出來ない。したがつて、この前後に相當長文の語録が綴られていたと推定される。それは凡らく和語燈錄七卷全卷の書寫でないかと思う。

而て、元亨版和語燈錄はその末尾の刊記に「沙門了惠感歎にたへず隨喜のあまり七十九歳の老眼をのこひて和語七卷の印本を書之、元亨元年<sup>辛酉</sup>七月八日終謹疏。法橋幸嚴卷頭<sup>5)</sup>」とあり。即ち七十九才の了慧が和語燈印行の版下文字を自から書いたのである。従つてその文字の書體は鎌倉末期の筆寫態である。而て、この元亨版和語燈と佛大圖書館所藏の和語燈錄斷簡との書寫筆態を比較するに一行の字數の異なりはあるが、ほとんど同じ筆法をもつて書寫しているのを見るのである。それで若し許されるならば、元亨版和語燈錄を筆寫したものが、佛大圖書館所藏和語燈斷簡の全體ではないかと想像する次第である。それで凡らく元亨版は印行部數僅少であつたため、誰れかがこれを書寫し、傳々あい傳えているうちに、その大部分を散佚し、僅かの斷簡のみが本學圖書館に収藏せられるに至つたと推定するのである。いづれにしても、上記の如く法然上人の語錄として明確に鎌倉時代の古寫本と推定されるものが、僅かしか存在していない現今において、元亨版和語燈印行とあまり隔たらぬ時代に書寫された法然上人の語錄を身近に見ることが出来るのは、學徒として誠に幸というべきである。

## 註

- (1) 石井教道著、選擇集の研究(總論篇)一五〇頁
- (2) 藤堂祐範著、淨土教版の研究(一〇四頁)には貞治四年に一枚起請文の印行のあつたことを傳えている。
- (3) 石井教道編、法然上人全集脚註より抄出。
- (4) 石井教道編、法然上人全集(序、一〇頁)
- (5) 龍谷大學藏元亨版、和語燈錄(淨土教版の研究所収の寫眞による)



選擇本願念佛集

南無阿彌陀佛

往生之業  
念佛為先

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正  
歸淨土之文

安樂集上云問曰一切衆生皆有佛性遠劫  
以來應值多佛何因至今仍自輪迴生死不

選擇本願念佛集

淨土教門解脫詮

今開本教弘流傳

迴施尊儀及群類

順次同生九品蓮

卷尾

